



きずなとコロナ

kizuna & covid-19

Writer / 幌別東小学校区きずな推進委員会リーダー 森 芳昭

コロナ禍でも定期的に町内会の花壇整備活動を続けていました。作業をしながら参加者同士の近況を報告し合う時間は、交流の生まれる大切な機会でした。感染症の影響で多くの行事や活動が止まってしまっていますが、地域のつながりを保ち続けるためにも、状況に応じて少しずつできることを増やしていきたいです。

これからも地域のみなさんと一緒に、より良いまちづくりができればと願っています。

第4期きずな計画策定研修を開催しました

2022年1月19日、令和4年社協民協合同研修会と同時開催という形で、第4期きずな計画策定研修を行いました。今号ではその様子をお伝えします。

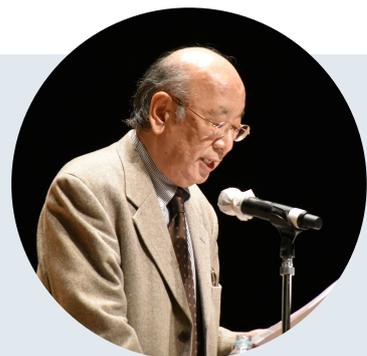
前段では、社協事務局より第4期きずな計画策定の進捗状況について報告を行いました。

コロナ禍でこれまで大切にしてきた市民との対話ができない中、1年の延期の後にPT会議やアンケート調査を軸とした策定の実施を決意したことや、これまでどのような協議を重ね重点項目を固めてきたのかを伝え、現時点で出来上がっている全市計画の素案もこの日共有されました。



演題「民意17年の重みときずな計画への期待」

きずな大使 鳥居一頼氏



続けて、きずな大使であり、北海道民生委員児童委員協議会「民生委員児童委員協議会のあり方に関する検討会」で委員長を務める鳥居一頼氏を講師に迎えた講演会へ。きずな計画のこれまでを振り返りながら、これからを期待と共に見据える内容でした。

鳥居氏は第1期策定時には「福祉のまちづくり推進会」（現きずな推進委員会）の委員長という立場で携わり、現在は登別のきずな計画のアドバイザーとして、市民一人ひとりがより豊かに幸せに暮らすことのできるまちの実現に尽力しています。

プロローグ「民意17年の重み」という詩では、市民と共に地域福祉実践計画を策定しようと決意した当時、道内でまだ前例がなかったことに触れ、連合町内会の全面的な協力のもと実現した約2万世帯へのアンケート調査では、約6割にのぼる1万1千世帯から声が寄せられたことが紹介されました。また、「戦争ときずなは対極にあるもの」とし、第1期策定時に関わった多くの人たちは戦争体験から平和を願い、きずな計画に当たり前の幸せな暮らしを託したのだと深い敬意と共に振り返りました。きずな計画の根幹は、地域を取り巻く実情が様々に変化する現在も引き継がれています。

これからに向けては、高齢であろうと障がいであろうと子どもであっても、一方的な弱者と決めつけるのではなく、それぞれにできることを見出すことのできる地域の必要性が語られました。誰かのために何かをしたいという純粋な気持ちは、きっと誰もがどんな状況にあっても持っており、その尊さを分かち合うことのできる地域に期待が寄せられています。そして、きずな計画の魅力を広く発信していく「メッセンジャー」は、今日この場に参加しているみなさんであるとの力強いエールが贈られました。



きずな計画は市民一人ひとりのものだと改めて感じ振り返ることのできる講演会となりました。

計画策定もいよいよ大詰め、残す期間も一丸となって進めていきます。

Kizuna &

地域福祉活動のお悩みは社協まで



社会福祉法人 登別市社会福祉協議会
 〒059-0016 登別市片倉町6丁目9番地1
 総合福祉センターしんた21内
 TEL / 0143-88-0860
 web / <https://kizuna-shakyo.jp/>
 mail / info@kizuna-shakyo.jp